
**** ~嘘つきな恋~ ****

美月椎奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＊＊～嘘つきな恋～＊＊

【コード】

N9519G

【作者名】

美月椎奈

【あらすじ】

特別な能力を持って孤立していた主人公、初音は、優人と名乗る妖と出会う。

○序章

私は昔から

孤立して生きて来た

死者の魂が見えるっていう

特別な力のせいで

ずっと、恐れられて来た

今も、それは同じだけど

でもね

もう寂しくないよ？

あなたに会えたから

私は変わったの

あなたがいるから

もう私は

独りじゃないの

○本編

私は、“普通”じゃない。

だから、いつも他の子達と距離を感じて生きて来た。

今も昔と変わらない。

私は、ずっと独りなんだよ……

キーンコーン

4時限目の終わるチャイムと共に、教室の中がざわめき始める。

「久遠^{クオン}さん、一緒にお弁当食べない？」

一人の私に気遣ってか、隣の七瀬^{ナナセ}さんが声をかけてくれた。

「あ、うん。ありが

「凜、やめてよ。暗いのがうつる」

私の言葉は遮られた。

七瀬さんと一緒にいた女の子が嫌そうな顔をして笑う。

何よ…。

確かに私はメガネだし、黒くて長い髪は、下の方で一つに縛ってるだけだし、顔だって可愛くないけど……

でも…

「え……。あ、ごめんね久遠さん……」

申し訳なさそうに七瀬さんが誤った。

やめてよ。逆に傷付くでしょ……。

「……いいよ。慣れてるから……」

私は、自分にしか聞こえないくらい小さな声で返事を返した。

泣いてしまいそうで、震える自分の声。

お弁当は、誰もいない屋上で食べることにした。

泣き顔なんて誰にも見られたくない。

屋上には幽霊が出るらしく、誰も近づこうとしないのだ。

私は、屋上で泣いた。

お弁当を食べるのも忘れて。

いっぱい、いっぱい泣いた。

さっきの事を忘れるために。

その時、誰かの気配を感じた。

「ねえ、どうして泣いてるの？」

男の声。

「…え…？」

顔を上げると、そこには見たことのない男の子が立っていた。

年は、私と同じくらい。

私は、屋上に出る幽霊の話思い出した。

……これって……、もしかして……

「あなた……幽霊なの……？」

「……そうゆう訳じゃないけど……、まあ……そんなもんかな……」

曖昧な返事。

「じゃあ、なんなのよ？」

「俺は、人間じゃない。でも幽霊でもない。………ユウト優人。あんたの名前は？」

「私…は、クオンハツネ久遠初音」

なんか、微妙に納得いかない…。

「初音ね。俺の事も呼び捨てでいいから」

「あ、うん…。あ…あのさ、人間じゃないって言ってたけど…それって」

「アヤカン妖って、聞いたことあるだろ？」

質問を最後まで言う前に優人が答えた。

「え…、うん…？」

「俺は、それなんだ」

…妖…。

「じゃあ、何年もその姿のまま生きてるんだ」

「…まあ…ね」

優人は、こんな世界で、何年も生きてるんだ。

「私なら耐えられないな。こんな世界にずっといるなんて暗くて…冷たくて……………」

私には、闇しか見えない。

「…そんなことないよ」

優人が言った。

「この世界にもいいところ、あると思うけど」

優人の顔は、真っ直ぐ私を見ていた。

何かを訴えかけるように。

「な…なんなのよ、もうっ！調子狂うでしょ！」

「え…、何がだよ？」

優人は何も気付いてない。

「無自覚なのが余計ムカつくのよ！」

「はあ！？…よく、分からないけど、時間はいいの？」

時間…？

私は、腕時計を見た。

1時5分。もう授業は始まっている。

「サボる。つてか、最初からそのつもり」

そう言つて、あらかじめ持つて来たスクールバックを優人に見せた。

「そつか。じゃあ付き合つ。これから家に帰るんだろ？」

「…え！？何でよ!？」

私は、びっくりして聞き返した。

「何でつて、……女子1人じゃ危ないと思うし……」

「何ソレ……。夜道じゃあるまいし……。つてか、あんた他の人には見えないでしょ……!?意味ないじゃん……」

「意味あるよ。妖力を使えば何だつて出来る」

ハイハイ。妖力ね……。つまり、何でも有りなんだ……。

……でも、なんか利用出来そう……。

「じゃあ、お願いしようかな……」

「うん」

すると、優人は笑顔でそう答えた。

…結構可愛いトコもあるんだ……。

「顔赤いよ？もしかして俺に惚れた？」

…は!？」

ヤらしい笑顔を浮かべて優人が言った。

「んな訳ないでしょっ!！」

バチン

私は、思いつきりあいつの頭を殴ってやった。

「つてえ！冗談に決まってるだろ！少しは手加減しろよ。ほら、行くぞ」

「あ。うん」

私達は、学校をこっそりと抜け出すことに成功。

ふと、私は校門の前で立ち止まった。

「あ…あのさ…」

「…なに？」

「あ…えっと、さっきの…ごめん…ね…?」

「さっきのって?」

優人が聞き返す。

「え!? ほ…ほら! 頭、殴ったとき! もう! 聞き返さないでよお…」
顔が熱い…。

きっと、赤くなってるよ…。

私は、素直じゃない自分を呪った。

「許す。俺、初音のそうゆうトコ、好きだよ」

優人は、愛しいものを見ているような、もの凄く優しい顔をして笑っていた。

ドキン

な…何…!? 何なのよ!?

「は…早く行こ!」

私は下を向いて、先頭を早足で歩いた。

「初音早いな。もう少しスピード落としてくれよ。俺、妖力使って疲れてるんだ」

ドキン

無理だよ……。

赤くなった顔をまたあなたが見たら、気付いたばかりのこの想いに気付かれてしまいそうで…

怖いの

「ちょっと君たち」

や…やばっ…！

警察の人に見つかってしまった…。

「こんな時間に何をしてるんだ？」

どおしよ…。

「え…えっと…」

私は、何も言えずにうつむくばかり。

すると、優人が私を庇うように前に出た。

「この子具合が悪いんですよ。一人で帰るのは、無理そうだから俺が付き添ってるんです」

最もらしい嘘。

しかも、笑顔で。

いろんな意味で怖いよ……………？

「そ…そっか。すまん。もう、帰っていいぞ。お大事に」

警察の人はそう言つて、あわてて戻って行つた。

「優人すごいね。嘘付くの上手い」

「………………。そんなこと……………」

え…？

優人は、なんだか寂しげに見えた。

なんで？

「…どうしたの…？」

「…何でもない…よ」

優人は笑つてたけど、見ただけで作り笑いだつて分かる。

ホントに優人、どうしたの…？

「ああ！優人君じゃない！学校には慣れた？」

え…？

私には知らないおばさん。

でも、このおばさんは、優人のことを知ってるみたい。

「あ…、えっと…、初音…これは……………」

優人は、しどろもどろして、とっさに言い訳を考えている。

なんだ。

そうゆうことか。

「騙してたんだね。私に変な力持ってるのをずっとバカにしてたんだ」

なんだ。

あんな奴にときめいた私ってバカみたいじゃん。

泣きたくもないのに涙が出てくる。

止まらない。

私は、その場から逃げ出した。

「っ！初音！」

「…おばちゃん、なんか悪い事言っただかしら？ごめんね…」

「大丈夫だよ。俺、ちょっと追いかけて来るから！」

涙が止まらない。

優人……

何であんな嘘付いたの……？

公園のブランコを揺らしながら、私はそんなことを考えていた。

「優人のバカアアアアアアアア！！」

思いつきり叫ぶ。

声と一緒に悲しい思いも出てけばいいのに……。

その時、誰かの手が私の手を掴んだ。

「バカで……ごめん……！！」

え……？

私は後ろを振り向いた。

「優人………？」

「うん。嘘付いたのは悪かったけど、言い訳くらい言わせるよ……」

優人…、息が荒いよ？

走って、追いかけて来てくれたんだ。

「い…よ。何で嘘なんか付いたの？」

私は知らなかったんだ。

あなたの負っている傷の深さに。

悲しみの深さに気付かなかったの。

「俺、白血病なんだ…」

……。

は……？

「な…何…、言ってるの……？」

白血病なんて、「冗談になってないよ…」。

「本当なんだ！だから、死ぬ前に初音に会いたくて……」

真剣な顔で話してる優人を見ると、なんだか怖くなって来る。

本当の話なんだって思えば思うほど、悲しくなって来るの……。

「なんで？私のことを優人は前から知ってたの……？」

「うん。知ってたよ。4年前からずっとね」

「え……、そんなに前から……！？」

4年前っていうと、中2の頃だよ……。

「俺、初音と同じ中学だったんだ。知らなかっただろ？」

……そうだったんだ。

「……うん。知らなかった……」

なんか、意外な接点があって嬉しいかも……。

「病気で休んでたから……。知らなくて当然だよな」

優人はそう呟いてからまた続けた。

「初音って、中学の時もいつも1人だっただろ？」

……まあ……、その通りだけど……。

……なんか、グサツとくるな……。

「うん。ってか、もうちょっと言い方選んでよね？私だって傷付く

んだから！」

「ごめんごめん…！」

別に分ければ良いけど…。

優人は続けた。

「俺も休んでばっかだったから、学校で孤立してたんだ。だから、親近感がわいたっていうか…」

「優人って、スラッとヒドいこと言うよね……………」

ちゃんと、可愛いつて思ってた欲しかったのに…………！

孤立してるって、優人の中の私のイメージって、どんだけ陰気なのよっ！

「悪い…………！でも、最後まで聞いて？」

うっ…。

優人は上目使いで私を見て来る。

ま…負けた…………。

私よりも可愛い…………！

「分かったわよ…………」

「ありがとう」

笑顔、可愛い…。

優人は、また話を続けた。

「俺さ、学校来てる時は、ほとんど初音を見てたんだ」

「へっ！？マジ…？」

「うん。最初は親近感からだったけど、段々と好きになってって…」

マジか……！

ヤバイ…。

かなり嬉しい。

「その、すぐに赤くなるとことか、たまに素直になるとことか、全部可愛くて大好き！」

…

可愛い

「って、初音どうした…！？俺の告白イヤだったのか！？」

え…？

あれ？

何でだろ…？

涙が止まらない。

「うん、違うの」

そうじゃないの。

「う…嬉しくて……。か…可愛いって、優人に言ってもらえて。私も優人のこと大好きだから…」

「え…。初音も…俺のことを…？」「…これって夢じゃないよな…！？」

優人は、凄く嬉しそうな声でそう言った。

うん。

嘘じゃないよ。

心の中の言葉の代わりに私はコクンと笑顔で頷いた。

「マジかよ！？俺、頑張って治療受けるからっ！絶対、それまで待

つてろよ！絶対に死なねえから！」

ホントに？

「し…死んだら許さないからねっ！一生恨むよ!？」

イヤだ……。

行かないで。

優人が白血病だっという現実を改めて思ったら、怖くて涙が出て来た。

ふわっ

「え…?」

優人の大きな手が、優しく私の頭を撫でる。

「大丈夫」

それだけ言って、優人は優しい顔をして笑った。

「本当に？」

「うん。絶対だ」

「私、会いに行くからっ！」

「うん。ありがとう」

そして私たちは、優しいキスをした。

もしかしたら、これが最初で最後になるかもしれない。

そんな思いをぶつけるかのように、そのキスは段々と深く激しくな
って行く。

私たちは、何度も何度も繰り返した。

10年たった今でもはっきりと覚えてる。

あの日のことは、

「おい！初音！優音ユネが抱っこして欲しいってさあ！」

少し離れた所から声が聞こえてきた。

「優人が抱っこしてあげれば…？」

「優音はママがいいんだってさあ！パパ妬げちゃうっ！」

わざと大きさに優人が言った。

「よしよし。パパも好きだよ！でも、抱っこはママがいいっ」

子供に慰められてるし……。

「…ぶっ…あははははー！いいよー！じゃあ、家まで抱っこしてってあげる！」

私は思わず吹いてしまった。

「やった〜あ！」

優音はジャンプして喜んでいる。

やっぱり子供って可愛いなあ。

「良かったな！」

と優人。

「うん！」

優音が元気良く返事をする。

「よおし！じゃあ、帰ろうか！？」

「おお！」

優人と優音が元気よくそう答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9519g/>

** ~嘘つきな恋~ **

2010年10月28日03時00分発行